さつき、さみだれ

とみいえひろこ

雨の音聴いているかもしれないな誰か抱いてるかもしれないな
読点をとられていってなにもかも幼くなってしまう水際
ひだりてをひらひらさせてかぶさればさびしいひとのひためんのこえ
読点のくちづけしよう　いち、にい、さん、　旧かなになって川のそばまで
毟りとったあとの雲だよそらよそらよこんなにはだかの灰色はない
須磨の空すこしさらって夕暮れこどもの爪を月にしている
底冷えの夜の豆腐を抱きしめる崩せと崩せと底から光る
ゆっくりと糸を吐き出す新しく懐かしいみずと泡の逢い引き
ほんとうに欲しいものなら知っている灰色の壁の青色のしみ
すくわれたり砂になったりさら、さら、さら　さらわれてゆく月がどうでも
甘いものばかり飲みたがる終電前わたしといるとき淋しいですか
しずかな、おだやかな夜は生まれる自力でそれは手に入れるもの
（助けて）はくぐもってゆくしずかにチェット・ベイカーのつぶやき吸って

逢いたさは痛さにもなる薄暗い朝ののみものを考えている
紙よりも軽い逢瀬の幾粒か死にゆくもののすべていとしい
朱鷺の声しませんでしたか片恋をいつまでもいつまでも風よりはぐれて
ぺたぺたはがれるしーるはっているあめのすいようまばたかぬひと
すっぱくていちばん切ない暗室でひんやり泳ぐ色になって、むかし
ああ言葉を交わすせつないロングシーズンぽたぽたと垂れるわたしの水は
いとおしい戒名として解き放つ嵐の夜に煮たジャム、スープ
その人の（苦しかりけり）落とされて透明で目に見えるもの何
明け方は月をくずしにかかるとき鳥葬をしてふたりの部屋で
きわといわたしを川に投げる空が青でも灰でも空がなくても
きんつばの底より深い逢い引きをあなたの爪に新月におう
銃声をききながら飲むみずうみに夕暮を垂らすわたしの窓辺

さっき、さみだれ

とみいえひろこ

@hirokodori

2014年5月のおわりに